

魔女の後悔

装幀 観野良太
写真 Getty Images

電話がかかってきたのは、スポーツジムで汗を流した私が麻布台の事務所兼住居に戻ってきた、午後八時過ぎだった。

いつもならジムに行くのは事務所を閉めた午前五時過ぎなのだが、八月に入ってようやく梅雨が明けたとたんにひどい暑さが東京を襲い、エアコンを効かせた室内にいても頭がぼんやりしてくるほどで、これならいっそ大汗をかいてやろうと思ったのだ。

二十四時間開いているスポーツジムは私と同じことを考えたらしいメンバーでひどく混んでいた。ランニングマシンで汗を流しプールで泳いだが、ジムを一步でると爽快感は消え失せた。湿気が体からみつき、熱いゼリーの中を動いているようだ。

ほんの数分歩いただけでTシャツが背中にはりついた。五階まであがるエレベーターの中で、私は後悔した。これならずっと部屋にいたほうがマシだった。

食欲はまるでない。おかげで二キロほど痩せて喜んでいたら、

「ババ臭い皺しわが増えたんじゃない？ ほう、れい、線しわが深くなったような気がする」

星川ほしかわにいわれ、落ちこんだ。

エアコンの風があたるソファにかけ、氷を大量に入れたアイスコーヒを飲んだ。あつというまに水滴がコースターの表面にたまる。

携帯が鳴り、液晶に「浄景尼じょうけいに」と表示された。京都鞍馬くらまの浄寂院じょうじやくいんの庵主あんじゆで、関西の極道には「鞍馬のおぼはん」で通っている。二十数年前に得度するまでは、滋賀から京都にかけて広い縄張りをもつ、鳴神なるがみ一家の女組長だった。八十年代半ば近くなるが、足腰は丈夫で、かけらも老いを感ぜせない。

世話になりっぱなしだったが、返しを求められたことは一度もなかった。

「ごぶさたしています」

耳にあてた私がいうと、

「暑うてかなわんな」

浄景尼はいった。

「鞍馬のほうは涼しいのじゃないですか、京都でも」

「あかん、あかん。今年は異常や。まったくどないなつてんのやろ。春やら秋がのうなつてもて。あんのは冬と夏だけ。それもえらいさむいかあつついか、ゆう。もう、はよ迎えがきてほしいわ」

「いけません！ そんなことをおっしゃらないで下さい」

ふふふ、と浄景尼は笑った。

「あなたに愚痴いうても、しゃあないわ」

「暑い暑いという愚痴でしたら、いくらでもお聞きします。お迎えを待つというのは聞けません。

庵主さまがいなくなったら、あたしは誰を頼ればいいんです」

「そのあなたに今日は頼みがあるんや」

「おっしゃって下さい」

「会^あうてほしい子がおんねん。十三歳の女の子や」

「庵主さまの仰せなら、いくらでも会います」

「そうか。それでな、もし、いっしょにいるんがいやでなかったら、その子を鞍馬まで連れてきてほしいんや。十三歳やから、もちろんひとりで電車には乗れる。けど、ひとりではさせたくないわけがあつてな。だからいうて、ごっつい男衆つけるいうんは、かわいそうやろ」

「ボディガードをすればよろしいのですね^{おなご}」

「あなたにさすのは役不足や思うけど、女子でそこまで信用できるんが他に思いつかん」

「庵主さまのお役に立てるなら、何でもやります」

「悪いな。本田^{ほんだ}由乃^{ゆの}、いう子や。その子の父親が浄寂院^{じやうじやくいん}の墓苑^{ぼえん}にいてる。夏休みなんて墓参りにきたい、いうとつてな」

「わかりました。墓参りだけでよろしいのですか。それだったら日帰りは忙しいので、一泊二日くらいの日程になりますか」

「それでええ。宿はこつちで用意するから、あなたがその子を手連れてきてくれるか。前に浄寂院^{じやうじやくいん}にきたんは納骨のときやったから、何も覚えてないと思う。母親は今入院しとつてな」

「新幹線は使つて大丈夫なんでしょうか、それとも車が無難ですか」

「新幹線で大丈夫や。あなたに頼むんは、万一のための用心や」

「命を狙われているとか」

「そこまで物騒な話やない。けど、さらいたい、いう人間はおるかもしれん」

十三歳の娘をさらってどうしようというのだろうと思ったが、それは口にしなかった。

私が理由を訊かずに動く人間だと考えたからこそ、浄景尼は依頼をしてきたのだ。

「わかりました」

「いつならいける？」

「来週なら、いつでも動けます」

スケジュールを思い浮かべ、私は答えた。

「わかった。その子に、あなたの携帯教えて連絡させる。ええか？」

「結構です」

「おおきに。会うの、楽しみにしてる」

浄景尼はいつて電話を切った。

私は立ち上がり、スケジュール表を確認した。来週の月曜から木曜まで、何もないかあっても動かせる用事しか入っていない。

浄景尼からの頼まれごとだ。軽く考えず、星川と木崎きざきのスケジュールもおさえておこう。

木崎はほぼ大丈夫だとして問題は星川だ。

性転換手術をうけた元警察官で、今は調査員をやっている星川に最近恋人ができた。

どこで知りあったのかは知らないが、ゲーム製作会社の作画監督をしているという男で、ひと目見ただけでかなりややこしい性格をしていると私にはわかった。

星川の話では、インテリで思いやりがあるがひどくシャイだという。年齢は星川より下で、たぶん三十代の半ばだろう。セックスは好きだが、並みの相手ややりかたでは満足を得られない。

そこに星川が嵌まったようだ。

同棲まではいかないが、週の半分をいっしょに過しているらしい。男の住居は新宿御苑を見おろす高層マンションで、賃貸か分譲かは知らないが、ゲームの映像を作るだけでかなり稼ぎがあるようだ。

星川の携帯を呼びだした。

「はい」

ご機嫌な星川の声が応えた。男といるにちがいない。妙に癪かんにさわる。

「来週だけど忙しい?」

「そっけなく訊ねた。」

「来週? 来週、何かあったっけ?」

男に訊ねている。返事は聞こえなかったが、星川はいった。

「大丈夫みたい」

「一泊二日の仕事を浄景尼に頼まれた。あんたも体を空けといて」

「遠出?」

「人をひとり鞍馬に連れていく。来週のいつになるかは、本人と相談してから連絡する」

「いい男?」

「十三歳の女の子」

「ベビーシッターね」

「そう。でも浄景尼の仕事だからしくじりたくない。わかるでしょ」

「了解」

「膝枕でもさせてやってるの?」

「いやだ、どうしてわかった? テレビ電話? これ」

私はため息を聞かせ、電話を切った。

一瞬後、携帯が鳴った。知らない十一桁の番号が表示されている。

「はい」

「あの、鳴神さんからこの番号を聞きました」

十三歳には聞こえない、大人びた声だった。男を知っているのかもしれない、と思った。近頃は、性経験をするのがやたら早いか遅いかのどちらかだという。

「水原みずはらよ。本田さん?」

「はい。あの——」

いつて黙った。言葉を探していたようだが、

「お世話になります」

とだけいった。

「大丈夫。行く前に一度会って相談しましょ。今、あなたはどこにいるの?」

「山梨です。学校の寮なんです。休みに入ったけど、いくところがなくて。明日、母の見舞いに清瀬の病院にいきます」

「そのあとは?」

「寮に戻ろうと思っていました。水原さんは来週がいいんですよね」

「京都にいくのはね。でも、その清瀬の病院を教えてくださいたら、あなたが帰る時間にあわせて迎えにいき、寮でもどこでも好きなところに送る。そのときに話しましょ」

一瞬間が空いた。即答しないのは、私の申し出を検討する頭がある証拠だ。知らない大人に何かを求められたら、十三歳の娘なら即座にいうことを聞くか断わるかだ。どちらでもないのは、自分で物ごとを決める習慣を身につけているからだ。

「わかりました。そうします」

清瀬の病院の名前を聞いた。何時頃がいいか訊ねると、午後六時と本田由乃は答えた。

「わかった。六時に病院の外で待っている」

と私はいった。

2

調べると、本田由乃の母親が入院しているのは終末医療の専門病院だった。末期癌患者などをうけいれている。父親は死に、母親が末期癌という境遇にあるとすれば、大人びるのも当然だろう。

メルセデスのSUVを運転して清瀬に向かった。病院は西武線の線路近くにあった。規模は決して大きくないがゆつたりと敷地をとり、高級ホテルのような造りをしている。

駐車場には高級車ばかり止まっていた。医師の車だけではないだろうから、入院患者の身寄りや裕福な者が多いようだ。

車を止め、ガラスばりのエントランスに立った。間接照明に浮かびあがるロビーには、ゆつたりとしたソファが並び、目隠しになる観葉植物がそこに配置されている。

六時少し前、エントランスのガラス扉を押して制服姿の少女がでてきた。小柄な上に細く華奢

な体つきだ。髪をうしろで結わえ、両手を握りしめていた。色が白く整った顔立ちだが、切れ長の目が赤い。

制服は野暮ったいセーラー服で、少女には似合わなかった。小さなリュックを背負っている。そのリュックを見たときとたん胸を締めつけられ、私は動揺を感じた。他人に同情することなどない人間なのだ。父のいない十三歳の少女の母親が末期癌だとわかってても、特に感慨は抱いてなかった。

リュックにぶらさがった小さなミニオンのぬいぐるみにやられた。体の黄色が抜けてしまい、妙にけばだっている。ひとりぼっちの少女がそのミニオンを握りしめている様が容易に想像できた。

「本田さん？」

歩みよった私は目を合わせず、いった。

「水原さんですか」

私は頷き、

「もう、いいの？　ここをでられる？」
と訊ねた。

「はい」

「お腹は？　晩ご飯は食べた？」

「いえ。でもあまり空いてません」

「じゃあとりあえず山梨に向かって、どこか途中で何か食べましょう」
告げて、私は駐車場を示した。

「はい。ありがとうございます」

SUVの助手席に由乃を乗せた。

「学校の寮はどこにあるの？」

「甲府市です」

細かい住所を訊くと、由乃は制服のポケットから生徒手帳をだし、開いて答えた。カーナビゲーションに入力する。圏央道から中央高速を使って向かうルートが表示された。二時間はかからない。

SUVを発進させた。由乃は無言で前を見ている。

「今、中学一年生？」

「二年です。三月生まれなので」

「寮は、中学から？」

「小学校からです」

「じゃあ長いわね」

「三年生から今の学校です」

「編入したということ？」

「それまで地元の小学校にいったのですが、父が亡くなったので、今の学校に転校しました。

伯父さんが、そのほうがいいだろうと。母がもう癌だったので」

「そう」

間が空いた。

「水原さんは、何をしている人なんですか？」

「何でも屋。表向きはコンサルタントってことになっている。相談に乗ったり、人と人をつないだり」

「じゃあ鞍馬の庵主さんは、水原さんのお客さんなのですか」

「お客さんじゃない。ずっとあたしがお世話になっている。恩返しをしたいけれど、何もいらないうっていの」

「そうなんですか」

「庵主さまとは仲がいいの？」

「ときどき電話で話します。どうしてるとか、困ったことがあったらいいなさいって。やさしくしてくれます」

「お父さんかお母さんを知ってるのかしら」

「よく、わかりません」

とまどったような表情だった。

「そう」

答え、車を走らせた。圏央道に入り、八王子ジャンクションで中央高速に合流した。

「お腹、空いてきた？」

相模湖を過ぎたあたりで訊ねた。

「少し」

「じゃあ談合坂サービスエリアに入ろう」

口数の多い子ではない。打ち解けていないせいかもしれないが、もともとそういう子なのだろう。

サービスエリアの駐車場に車を止め、

「何が食べたい?」
と訊ねた。

「パンがいいです。サンドイッチかハンバーガー」

スターバックスがあった。コーヒーとサンドイッチを買い、奥のテーブルにすわった。

「あの、お金——」

「気にしなくていい」

「でも」

「あなたのお母さんはお金持かもしれないけれど、あなたは中学生。大人が払うといったら、そうすればいいの」

近くから由乃を見つめた。どこかで会ったことがあるような気がした。だがそんな筈はなかった。私の生活に、中学生の娘がかかわる余地はない。

「わかりました。ありがとうございます」

由乃はいつて頭を下げた。

「部活は何をしているの?」

「陸上と読書です」

「読書?」

「読書部です。本が好きなので。母が本好きで、おもしろい本を教わっているうちに、わたしも好きになりました」

私は頷いた。

「お母さんは、あの病院に長いのか？」

「あそこに移って半年です。その前は都心の病院でした。あそこに移ってからは、うつらうつらしていることが多いので、あまり話せません」

私は無言でアイスカフェラテを飲んだ。

「伯父さんの話では、今年いっぱいいくらいだつて……」

「伯父さんはお医者さんなの？」

「昔、そうだったつて聞きました。今はちがう仕事をしています」

「お医者さんをやめて？」

由乃は頷いた。

「医療機器の会社みたいです」

「伯父さんは、母かた父かた、どっちの？」

「母の兄です」

サンドイッチを食べていると、

「水原さんは結婚しているんですか？」

と由乃が訊ねた。

「ずっと独身」

由乃は私を見つめた。きれいな白目をしている。だがそのせいで視線をきつく感じる。

「結婚したいと思った人はいなかったんですか」

意外に感じた。そういう立ち入った質問をする子には見えなかった。

「大昔はいたかもしれない」

「今いくつなんです？」

答えると驚いたのか、目をみはった。

「もっと若いと思いました。お母さんより年下だろうって。お母さんと同じ年です」

「お礼をいう場面？」

「本当のことです」

「いろいろお金をかけているから」

「それは男の人のためですか？」

「難しい質問ね。特定の誰かのためという意味ならちがう。いろんな男の人に魅力的だと思われるたいという意味ではイエス」

「もてるため？」

「男の人にもってて損をすることはない。必ず得をするとはいえないけれど」

由乃は私を見つめている。

「クライアントを含め、会う男性に魅力的な女性だと思われるほうが、コンサルタントの仕事はうまくいく。それに鏡を見るたびに落ちこんでいたら、毎日が楽しくないでしょう」

「落ちこむんですか？ そんなにきれいなのに」

「きれいという意味でなら、あなたのほうがはるかにきれい。肌もきれいだし、顔立ちもあたしより整っている。化粧をして、よりきれいに見えるような服を選んでいるから、そう思えるだけ」

由乃は首をふった。

「わたしが水原さんの年になったら、絶対にそんなにきれいじゃない」

「きれいでいたいの？ ずっと」

訊ねると、由乃は黙りこんだ。やがて答えた。

「わからないです。でも、誰かのためにきれいでいたいとは思わない。きれいになるのは自分のため」

「それでいい。誰かのためにきれいでしたら、その誰かがいなくなったら、どうすることもできない。好きな人、いる？」

頷いた。

「でも今だけ、と思います」

「学校の人？」

「クラブの先輩です。全寮制なんで、どうしても、同じ学校の人を好きになる。だから本当かどうかかわからない」

「本当に好きなのかどうかかわからない、という意味？」

「はい」

「冷静ね」

「よくいわれます。醒めてるって」

私は笑った。

「生意気ですか」

「あなたに醒めているっていった人が生意気。本当に醒めているかどうかなんて、簡単にはわからない」

「わたしもそういました」

「醒めているといったのは、あなたが好きな人ね」

由乃は目をみひらいた。

「どうしてわかったんです？」

「わかるから。熱くなるときは必ずある。一生醒めて生きるなんてできない」

「水原さんはそう見えません。いつでも醒めている感じがします」

私は首をふった。

「それはさんざん燃えて、燃え尽きたからかもしれないわね」

「恋愛に、ですか」

「いっぱいあるわよ、他にも。食べなさい」

食べかけのサンドイッチを示した。

3

とりとめの話をつづけ、由乃を学校の寮まで送り届けた。打ち解けたとまでは思わなかったが、不要な警戒心を抱かれたとも感じることなく別れた。月曜日の正午に東京駅で待ち合わせた。制服ではなく私服で、一、二泊する準備をしてくるように告げた。

東京に戻る道を走りながら、車載スピーカーにつないだ携帯で星川を呼びだした。由乃が通う学校と母親が入院する病院について調べるよう頼む。

話しただけの印象では、由乃の警護を浄景尼が求める理由がわからなかった。暴力団幹部や大物フィクサーの娘や孫ということであれば、関係者のボディガードがつく。

政治家や企業人の隠し子という可能性も同様に考えられなかった。

十代初めから半ばにかけての少女くらい、考えていることがわからない生きものはいない。無邪気にけらけら笑った次の瞬間に自殺を決めるような世代だ。強固な殻に閉じこもり、家族を含む他者を排除するくせに、会ったこともないアイドルや読んだ小説、マンガにあつさり人生を左右される。友だちに捨てられるのを何より恐れるが、捨てることは恐れない。

薄いガラスとダイヤモンドを貼り合わせたような心をしているのだ。ある部分はひどく脆いくせに、ある部分は冷酷なほど頑丈だ。大人びていても子供だが、子供扱いしたとたん心を閉ざす。京都に送り届けるだけなのだから、心を閉ざされても一向にかまわない。なのにそれを覚悟できないのは、けばだったあのミニオンのぬいぐるみのせいだった。

私は十四のときに、血のつながる祖母の手で熊本県の八代海（と）に浮かぶ売春島に売られた。処女だった私は、その島で何千人という男の相手をさせられ、十年後に脱出した。

売られた直後、ことあるごとに握りしめ祈ったのが、くまのプーさんのぬいぐるみだった。あのミニオンと同じ黄色い布を貼られ、ぷっくりとふくらんだプーさんが、唯一、私が語りかけられる存在（だ）だった。

だがそれは、いつのまにか失くなった。どこでどんな風に失くしたのかも覚えていない。祈っても救われないと知り、自らの力で願いをかなえる他ないと悟ったときに、プーさんの存在は必要なくなったのだ。

由乃にそうなってほしいという気持と、なってほしくない気持が、相半ばしていた。

両親との縁は薄いかもしれないが、あの子が孤独だとは限らないし、誰かがあの子を傷つけようとしていると決まってもいい。

浄景尼は、命を狙われるほど物騒な話ではない、といった。だが拉致^{らち}を考える人間はいるかもしれないという。

それは由乃が誰かに恨まれているのではなく、由乃に価値がある、ということだ。由乃の身とひきかえに何かを得られる。

誘拐は、警察が介入した時点で、必ず失敗する犯罪だ。交通網と銀行口座の監視により、簡単に犯人の所在が割りだされる。

誘拐が成功するのは、警察がその発生を知らない場合に限られる。被害者が捜査を望まず、秘密裡に身代金を支払いたいと願えば、犯人は逮捕を免れる。

それは被害者にもうしろ暗い事情があつてのことだ。犯罪や大がかりな脱税、賄賂^{わいろ}などの表にだせない金をもつ者やその身内は、誘拐の標的にされやすい。

父親が死亡し、母親が末期癌におかされている由乃にそうした身内がいますれば、元医師だという伯父くらいだが、よほどの犯罪に手を染めていない限り、浄景尼が拉致を警戒する筈がなかった。

談合坂で上り線の渋滞にひっかかっていると、星川から電話が入った。

「金持よ。学校も病院も、すごくお金がかかる。病院は、月六百万の個室から。上は三千万の部屋がある。学校も、生徒数は少ないけれど、べらぼうな学費がかかる。生徒の大半は、大物の隠し子とか閉じこめておくしかない金持の悪ガキばかりらしい。さらいたくなくてもおかしくない子だった？」

「それでもない。考えていることはわからなかったけど」

「あんたがわからないの？ 女の子だとしても、珍しいわね」

「賢いの。変になついてもこないし、あからさまに敵視もしない」

「大人びているってこと？」

「そうならざるをえない事情があるのね」

「それが何だか、聞いた？」

「聞いていない。本田という名で、五年くらい前に死んだ男について調べてみて。十三歳の子が小学校三年生だったときに、父親が死んでいる。あと元医師で、医療機器を扱っている男。そっちは名前がわからない」

「儲けているの？」

「医者をやめるからには、よほどの儲けが見込めたか、やめざるをえない事情があつたかだと思う」

「そっちは本田じゃないの？」

「母方の伯父だから、ちがうと思う」

「やってみる」

麻布台に帰り着いたのは、午後十時近くだった。

浄景尼に電話をした。

「会いました」

「どやった？ 仲よくやれそうか」

「大丈夫です。月曜日にかがいます。夕方近くになるかと思いますが。京都駅から電話します」

「そうして」

答えたあと一瞬沈黙し、浄景尼は訊ねた。

「何か話した？ あの子」

「いえ」

「賢い子やな」

「そう思います。自分のおかれた立場を理解している」

「他にどう思った？」

「どこかで会ったことがあるような気がしました。そんな筈はないのですが。母親を知っているのかもしれない」

「母親の名は、本田雪乃ゆきのや。知ってるか」

記憶になかった。私と同じ年だと由乃はいった。

「名前には覚えがありません」

「写真を見せてもらおうといい。今の子やから、携帯にもっているやろ」

「あたしが知っていておかしくない人でしょうか」

探りを入れた。

「そうは思わんけどな。もしかしたら、どこぞで会うとるかもしれん。世の中は狭い」

「月曜日に会ったら、見せてもらいます」

「あんじょう頼むな」

「はい」

浄景尼は笑い声をたてた。

「あんたらしいわ。お任せ下さい、ともがんばります、ともいわん。ただ、はい、や。だから」

番信用ができる」

電話は切れた。

翌日の夕方、外での用事をすませた私が戻るタイミンで、星川がやってきた。髪をボブにしてメッシュを入れている。

「何なの、その髪型。彼氏の趣味？」

星川は口をへの字にした。

「ボブが好きなの。本当は紫にしてほしいといわれたんだけど、それはウィッグで勘弁してもらった。尾行も何もできなくなっちゃうから」

「尽したいタイプなのにな」

「うるさい」

ソファに腰をおろし、ノートをバッグからとりだした。

「三年前から七年前まで調べたけど、本田という死んだ男で、それらしいのはいなかった。和歌山の金貸しで九十四歳というのがいるけど、さすがにちがうよね」

「どんな奴？」

「闇金の元ネタを回していたらしい。金貸しに金を貸していた。とんでもないごうつくばりで、極道からも容赦なく取りたてるんで、何回か命を狙われたこともあったみたい」

「死因は？」

「老衰」

ちがう、という気がした。

「身内は？」

「大阪と和歌山にいる。息子があとを継いだけど、親父とちがってボンクラだって」

「息子って、いくつよ」

「ええと、今六十五かな。四人も五人も愛人を囲ってて、毎晩、新地やミナミで飲んでるらしい」

私は首をふった。

「それじゃない」

「他にめほしいのはいない。あと、医療機器を扱っている元医者というのは、漠然としすぎていて、絞りこむのにもう少しかかる」

「月曜までにできそう?」

「やれるだけやる。新幹線の切符は用意する?」

「『のぞみ』でお願い」

「三枚でいい?」

私は頷いた。万一を考え、木崎には私たちより先に車で東京を出発するようにいつてあった。

必要ならピックアップしてもらおう。といっても『のぞみ』に乗ったら、京都の手前で降りられるのは品川、新横浜、名古屋の三駅しかない。

「道具はどうする?」

「拳銃はいらなと思うけど、丸腰は不安」

「スタンガン? いつもの強力なやつ」

私は頷いた。

「それでいこう」

「あんたはその子と並びの席。あたしは斜めうしろの席にする」

「そうして。晚ご飯、食べにいく?」

「ごめん。今日は料理番なの」

あきれて星川を見つめた。

「料理なんてしたっけ?」

「彼が得意なの。それで教わった」

「何作るの?」

「ビーフシチュー」

「この暑いのに?!」

「それが一番失敗しないから。バゲット買ってサラダも作る」

「あとは赤ワインでわけ?」

星川は頷いた。

「熱中症になりそうだけど」

「もうなってるじゃない」

何かをいいかけ、首をふった。

「まあね」

「せいぜい楽しみなさい」

星川は立ち上がった。

「そんなこといわれると心配になる」

「どうしてよ、素直な気持よ」

私を見つめ、

「彼から何か変なもの、感じたんじゃないの？ いや、いわなくていい。聞きたくない」

両手で耳を塞ぐ真似をした。

「感じたのは、ややこしい性格だということだけ。あんたを傷つけるとは思ってない」

星川は息を吐いた。

「よかった。それを聞くのがずっと恐かった」

「さっさと帰んな」

私は手で追い払った。

星川がでていき、私は由乃のことを考えた。

妙だった。男についてはよく考えるが、女、それも十三歳の子供のことをつい考えてしまう理由がわからない。子供好きではもちろんないし、考えたくなくなるほどあの子を知っているわけではない。

携帯が鳴った。星川だ。

「何？ シチューやめた？」

「外にでて気づいた。あんたのとこ見張ってるのがある。警察じゃないし極道にも見えない」

「じゃ何なの？」

「探偵かな。興信所くさい」

「女房もちにちょっとかいだした覚えはない」

由乃と関わっているのだろうか。清瀬の病院や山梨の寮を監視する者がいたら、私の車からここをつきとめることは可能だ。

「調べる？」

「シチューはいいの？」

「熱中症になりたくないから、冷やし中華を買っていく」

「じゃあよろしく。手をださないで正体だけつきとめて」

「了解」

拉致を考えるような連中が探偵を使うとすれば、それなりに荒っぽいタイプを選ぶだろう。探偵にもいろいろいる。元警官、元極道、女の味方を自称する浮気調査専門。星川の口ぶりでは、荒っぽいのではなさそうだ。

星川が尾行しやすいように、外にでかけるのはやめ、中華料理の出前をとった。多少頭の回る探偵なら、出前先が私の部屋だとわかれば、今夜はでかけないと考える。

冷やし中華と春巻を食べ、調べものをしていくと、星川からメールがきた。西新宿に事務所のある大手探偵社の調査員だったようだ。接触はしていないので、調査の理由まではわからない。

由乃に関係する者が雇ったのか。表面的な調査をまっとうな探偵社にやらせ、誘拐を別の人間にやらせるといふ可能性もないではないが、通常は調査も誘拐も同じ人間に任せるものだ。大手探偵社は誘拐など請け負わないし、調査対象者（この場合は私だ）が犯罪に巻きこまれたら警察に通報するだろう。

由乃に接触する人間を警戒し、調査させているが、誘拐までは考えていないということだ。

可能性があるとすれば弁護士だ。由乃が相続する財産の管理を任されている弁護士が、由乃の身辺を警戒している。死んだ父親が入院中の母親に頼まれて由乃を監視し、接触した私のことを調べた。そう考えるのが妥当だ。

私について知れば、弁護士は不安になるだろうが、それは弁護士の問題だ。

由乃は自分が監視されているのを知っているだろうか。

おそらく知っている。いろいろなことを知ったり感じていて、それらをすべて呑みこんで暮らしているような気がした。

午前二時、パソコンにメールが届いた。送ってきたのは、私と同じようなコンサルタントの仕事をしている白戸しろとという男だった。元自治省の役人で、何をまちがったか裏社会に入ってきた。

統計などの数字を扱うのがうまく、信用調査の正確さで名前を売った。

極道ともつきあいはあるが、荒っぽいことは嫌う。外で動くことはほとんどせず、コンピュータを操るだけで調査の大半をこなしている。

以前、その調査のせいで出資を断われたフロントに狙われているのを助けたことがあった。バックに組がいるとは誰も気づいていない内装業者で、大手不動産会社を顧客に手広くやっていた。その、小さな取引先だった観葉植物のリース業者から、暴力団のフロントであることを白戸は調べた。出資を断われたのも痛手だったが、フロントであるときとめられたことで、大手不動産会社とのつきあいを切られ、内装業者は白戸を排除しようと考えた。

事故を装って殺すか大怪我をさせようという計画に、たまたま私が気づいた。白戸とはただの知り合いというだけで、敵でも味方でもなかったが、排除を請け負った男と因縁があり、結果として白戸を救う結果になった。

メールには電話で話したいとあり、固定電話の番号が記されていた。

私はその番号に携帯からかけた。

「はい」

「水原」

「あ、水原さん。白戸です。その節はお世話になりました」

「大丈夫なの、この電話」

「固定電話は盗聴されやすい。」

「大丈夫です。週いちで、清掃業者を入れていて、それがきのうでしたから」

「そう」

「蟹江はその後どうしています？」

「服役中。あと二年はでてこれない」

「蟹江というのが、白戸の排除に雇われた男だった。」

「そうですね、あと二年」

「白戸はつぶやいた。」

「でてきたら、まっ先にあたしのところに乗りこんでくる。あなたのとこにいくとしても、そのあと」

「そうですねですか。それで水原さんは大丈夫なんですか」

「まだ何もしていないのだから、心配してもしかたがない。それに恨みを晴らすにも、準備がいろいろいる。それをすればあたしに伝わってくる」

「白戸は息を吐いた。」

「水原さんは強いなあ」

「そんな話をしたかったの？」

「あ、ちがいます。これは信用に反することなんです、あなたについて調べてほしいという依

頼がありました」

私は思わず笑った。

「人気者なこと」

「え？」

「こつちの話。調査は誰に頼まれたの？」

「麻布十番にある『伊東交易』という商社の社長です」

「社長の名前は？」

「金村。たぶん金というのが本名です」

金という知り合いは何人かいたが、麻布の伊東交易は知らない。

「あたしを調べる理由は？」

「それは聞いていませんが、その金は、韓国国家情報院の元職員で、今でもつながっている可能性があります。国家情報院というのは韓国最大の情報機関で、元はK C I Aだったところです」

「そうなの」

「そうなのって、水原さん、韓国政府と何かトラブルを抱えていませんか」

「まったく」

「まったく何です？」

「抱えてない」

「じゃあどうして金が水原さんのことを調べているのでしょうか」

「あたしにわかるわけがない。その金はあたしのことを調べて、どうしようというわけ？」

「わかりません。まずは水原さんに知らせようと思って」

「ありがとう。だったら金の目的も調べて」

「え？」

「難しいことじゃない。あたしについて調べ、報告するといつて訊きだせばいい」

「いいのですか」

「調べるのは仕事でしょう。それとも金の依頼を断わるつもりだったの」

「いえ、それは……」

白戸は口ごもった。

「あたしに知らせるだけ知らせて、調査はするつもりでした。ちがう？」

「まあ、そうです」

「だったらそうして」

「わかりました。調べさせてもらいます」

「あたしも知らないことがわかったら教えて」

「えっ」

「冗談よ」

「ですよ。水原さんが知っているかどうかなんて、僕にわかるわけがない」

頭はいいが、コミュニケーション能力は決して高くない。

「いいんですね、水原さんのことを調べて」

「調べがあるわよ。秘密はいっぱいあるから」

「そうでしょうね。ちよつとどきどきしているんです」

「金はどこであなたのことを知ったの？」

「あの、紹介です。大手の不動産デベロッパーの幹部から、僕のことを聞いたといっていました」

私は息を吸いこんだ。

「そう。ありがとう」

電話を切り、壁を見つめた。白戸は幹部くわんぶといった。トップではない。

西岡にしおかタカシは去年、その父親が一代で築いたウエストコースト興産という大手デベロッパーの社長に就任した。さまざまな因縁があり、タカシは何度か私を殺そうとした。最後に会ったとき、私はタカシの女を殺した。タカシと自分を救うためだった。

星川にいわせれば、私は年下のタカシに惚ほれているらしい。自覚はない。成長をおもしろがり楽しみに思っているが、タカシと寝たいと感じたことはないからだ。

本田由乃の件にタカシがかかわっているのだろうか。タカシだったら、人を使って調べさせるような、まだるこしいことはしない。直接私に会いにくる。会って、由乃とどんな関係か訊く筈だ。

タカシの父親は帰化した韓国人で、その点では金とつながりがあつておかしくはない。白戸しろに紹介したのはウエストコースト興産の幹部くわんぶかもしれないが、タカシではない筈だ。

タカシのことを考えると、わずかに胸が痛んだ。星川には決していえない。

むろん、由乃とはまったく無関係な理由で、新宿の探偵社や金が動いている可能性もある。私に恨みを抱いている者は少なくないし、利用しようと考えている者も負けず劣らずいる。そのどちらも、目的のために私のことを調べて不思議はない。

浄景尼に訊けば由乃について話してくれるかもしれないが、それをするのは浄景尼の期待を裏

切るに等しい。

つまらない意地かもしれないが、これほど恩を受けている人を、少しでも失望させたくなかった。

体がべとついていた。シャワーを浴び、思いきり冷やしたシャンペンを飲むことにした。飲めばまた体が熱くなるのはわかつているが、氷のようなシャンペンが好物なのだ。

シヨーツにTシャツ一枚でソファに寝そべり、シャンペンを飲んだ。気づくと寝こんでいた。

4

由乃はチェックのシヨートパンツに木綿のシャツ、薄いベストといういでたちで東京駅に現われた。丸みのあるボストンバッグをさげている。大荷物ではないことに安心した。

たいした荷物でもないのにキャリーバッグをごろごろひきずる子供に私はいらつく。自分では旅慣れているつもりかもしれないが、田舎者には見ええない。

由乃は派手ではないが田舎者にも見えない。

「この人は星川さん。あたしたちといっしょにくる」

星川を紹介すると、由乃は小さく頷き、

「よろしくお願いします」

とだけいった。星川は由乃をじっと見つめた。

「よろしく」

その声を聞いて、由乃はわずかに目をみひらいた。

「うまく化けてるでしょう」

私は小声で由乃にいった。

「化けているのじゃないから。工事済みよ」

星川がいった。

「そう。工事済み。でも元が元だから、頼りになるの」

私はいった。

「元？」

由乃が訊き返した。

「こう見えて、元お巡りさんよ」

由乃は目を丸くした。

「すごい。そんなにスタイルいいのに」

「聞いた？」

勝ち誇ったように星川はいった。私は大きく息を吐いてやった。

「中学生なのに気配りなんかしないの」

由乃は首をふった。

「気配りなんかじゃありません」

星川は麻のパンツにTシャツ、麻のジャケットという格好だった。大きめのリュックを肩にかけている。リュックは麻のジャケットに皺を作るが、走ったり素早く動くためには、手提げというわけにはいかない。

「お腹は？」

「東京にくる電車の中でおにぎりを食べました」

由乃は答え、飲物だけを買って私たちは「のぞみ」のグリーン車に乗りこんだ。由乃を窓ぎわにすわらせ、私はその隣、斜め二席うしろの通路側が星川だ。

強烈な日射しが注ぎ、最高気温を更新しそうだ。朝のニュースが報じていた。熱気のこもったホームからエアコンの入った列車内に入り、ほっとした。

「暑かったわね」

腰をおろして私というと、由乃は頷いた。

「でも山梨はもっと暑かったです」

「京都も暑いわよ、覚悟して」

「そうなんですか」

「夏暑くて冬寒い」

由乃は宙を見つめた。

「覚えてません。納骨のときにいった筈ですけど」

「お父さんはおいくつで亡くなったの？」

「六十歳です」

「遅い子だったのね」

「生まれたとき、父は五十一でした」

「ご病気？」

「脑梗塞だったそうです」

「のぞみ」が動きだした。話しながら同じ車輻に乗ってくる者を見ていた。怪しいと感じる者は

いない。中国人の家族連れ、年齢差のあるカップル、一瞬気になったのはビジネスマンらしい二人組だ。席にすわるなり、パソコンを開き、キーボードを叩き始めた。

由乃は窓の外を見つめている。私は話しかけないことにした。

品川に着いた。品川からは新たな中国人の一团が乗ってきたが、満席になるほどではない。

「京都には何度かいった？」

「納骨以来です。母の具合がずっと悪かったので」

「そうか」

「水原さんは庵主さんのところによくいかれるんですか」

「たまに、かな。頼みごとをしにいくばかりで本当に申しわけなく思っているの。だからあなたを連れてきてといわれたときは恩返しできるチャンスだから、張りきっちゃった」

「お金になるわけじゃないんですか？」

「あなたを連れていくことで？ お金以上。庵主さまの役に立つことなら、何でもやりたい」

由乃はほっと息を吐いた。

「よかったです。本当は迷惑なのじゃないかって思ってたので」

私は由乃を見やった。

「緊張はしてる」

「緊張？」

「あなたくらいの子と接したことがないの。何が嫌で何が楽しいのかわからない。鞍馬までずっと口をきかないでもいいけど、苦しいじゃない」

由乃はまじまじと私を見つめ、私が笑うと吹きだした。

「びっくりしました。水原さんが緊張するなんてありえないと思っただけ」

「本当よ。あなたは大人っぽいから平気だけど、きゃあきゃあうるさい子供は苦手なの」

「きゃあきゃあ」

由乃は口を手をあて笑った。

「でもわかります。自分のことを教えたくないときや仲間に入れてたくないとき、どうでもいい話をきゃあきゃあ話して、スキを作らないようにするときがわたしもあるのです」

「女の子って残酷だからね」

「水原さんも同じでした？」

「訊かれ、私は一瞬、言葉に詰まった。この子よりひとつ上の年のとき、私は祖母の手で売られた。売られた先は、熊本県の八代海に浮かぶ島だった。島すべてが売春業で成りたっていて、二十四でそこを抜けだすまで、何千人という客の相手をさせられた。」

「ごめんさい」

由乃がいった。傷ついた表情を浮かべている。

「よけいなことを訊きました」

私の沈黙を傷つけたからだと思い、そのことで自らも傷ついている。

「ちがう、ちがう。そういうことじゃない」

私は首をふった。

「あんまり笑わなかったのは事実だけど。でもそれはあなたも同じでしょ」

由乃は私を見つめた。

「でも笑えるときは思いきり笑うこと。そうじゃないと笑うのを忘れちゃうから」

「はい」

由乃が小さく頷いた。そして窓の外に目を向けた。よけいなことを訊いたと後悔しているにちがいがなかった。私は否定したが、それが嘘であることも気づいている。

不意に、ガクンと列車が揺れた。立っていればよろめくほどの衝撃だった。車でいえば加速しようとしてギアを落としたのに、それに失敗したような動きだ。

それを証明するかのように速度が落ちた。

車窓を流れる景色が自動車ほどのスピードになり、それが自転車になり、やがて人が歩くほどになった。

多摩川を渡り、新横浜にじき着こうかというあたりだ。

列車は停止しかけ、また動く。エネルギーが止まっては供給されるのくり返しのようで、ガクンガクンと進んだ。何かが起こっていることは容易に想像がついた。

止まっては動くをくり返すうちに、停止する時間のほうが長くなり、アナウンスが流れた。

「お急ぎのところ、ご迷惑をおかけしております。ただいま連絡があり、送電にトラブルが発生したとのことです。詳しい情報が入りしだい、お知らせいたします」

由乃と顔を見合わせた。

「待つしかない」

私がいうと、こつくりと頷いた。私は携帯をとりだし、木崎にラインを打った。

『今どこ？』

少し間をおき、返信があった。

『御殿場の手前です』

『悪いけど戻ってくれる？ 列車の具合がおかしい。もしかすると乗りかえることになるかもしれない。今は新横浜の手前』

『新横浜に向かいます』

『お願い』

その間も、まるでしゃっくりをくり返すように揺れながら列車は進んでいた。

アナウンスが流れた。

「ご迷惑をおかけしております。トラブルは変電所で起こったものと判明いたしました。ただいま別の変電所を経由して電力を供給する作業をおこなっております。お急ぎのところ、たいへん申しわけありませんが、もうしばらくお待ち下さい」

携帯にラインが届いた。星川だった。

『火事みたいよ。暑さで電線の被覆が溶けて、それで燃えた。熱海からこっちの列車は全部おかしいみたい』

『木崎を新横浜に呼んだ。万一の場合は乗りかえる』

『まさかこれがその子を狙って、ということはないよね』

『わからないけど注意して』

由乃が私を見ていた。

「ニュースを見ていたの。猛暑で電線が溶けちゃったみたいよ」

「じゃあ止まっちゃうんですか」

「可能性は高い。そうなたら車に乗りかえるかも」

無言で目を見ひらいた。いたずらに騒がない。状況が把握できていないのもあるだろうが、腹

がすわっている。

「知り合いが迎えにくる」

小声でいった。由乃は小さく頷いた。

アナウンスが流れた。

「間もなく新横浜に到着いたします。新横浜で停車し、送電の回復を待つ予定です。たいへんご迷惑をおかけいたしますが、何とぞご理解とご協力をたまわれますよう、お願いいたします」

列車がホームに入った。ホームに入つたとたん滑らかに動き、停止位置まで進んだ。

何人かの乗客が立ちあがった。新横浜が目的地なのにグリーン車を使う者は少ない筈だ。この運行状況に、列車を降りようと考えているのかもしれない。

扉が開き、プラットホームで流れているアナウンスが聞こえてきた。

「——のところ、いつ発車できるかはわかりません。たいへんご迷惑をおかけいたしますが、もしばらくお待ち下さい」

降りていった客と入れちがいに、スーツにネクタイをしめた男が四人、前方から私たちの車輻に乗りこんできた。動かないとアナウンスしているのに乗ってくるのは妙だ。しかもシートのひとつひとつをのぞきこんでいる。

「いくわよ」

私はいって、立ち上がった。二人とも荷物は手にもっている。うしろの乗降口から降りるつもりだ。

私の背中で男たちの視線をさえぎり、由乃を通路にだした。腰に留めたスタンガンのケースのカバーを外す。斜めうしろにすわる星川に小さく頷いてみせた。

「まっすぐいって」

由乃は無言で通路を歩いていく。私はその場で動かず、入ってきた男たちの進路を塞いだ。

「ちよっと！ その女の子！」

ひとりが叫んだ。由乃が足を止めた。

「いきなさい」

私はいって、男たちをふりむいた。この暑いのに紺やグレイのスーツに白シャツ、ネクタイ。

どこにでもいるサラリーマンのような服装だが、誰ひとり贅肉がない。極道ではない。むしろ兵士のような。

私と目の合った男は、髪もクルーカットにしている。その髪型に、日本人ではないかもしれないと思つた。年齢は三十代のどこかだろう。ものを深く考えないタイプだ。今日やるべきことをやったら、明日のことは明日考える。一度決めたことをくつがえすのを好まず、目の前の作業に集中する。

仕事を離れば、単純でつきあいやすい人物だろう。ただし敵対する相手には一片の容赦もない。

私は微笑みかけた。一瞬、浅黒くのっぺりとした顔に動揺が浮かんだ。敵と認識している人間に笑いかけられて、どう対処すべきかのマニュアルがないのだ。

股間を蹴り上げた。言葉にならない叫びをあげ、うずくまる。その体がつづく者の進路を塞いだ。由乃のあとを追って走った。

パチパチパチというスタンガンの音が聞こえ、呻き声があった。ふりむくと、うずくまった男をどきこえた仲間に、背後から星川がスタンガンを当てていた。

二人目も通路に倒れこみ、私は由乃につづいて車輻の扉をくぐった。

車輻後部には乗降口がなかった。車掌室なのだ。その扉が開き、受話器を耳にあてた白い制服姿が見えた。

星川が扉から走りでてきた。

「急いで！」

由乃と三人一列でうしろの車輻に入った。通路を走る。

「何者？」

走りながら私は訊いた。

「わかんない。でもいい体してた。インカムをつけてたし、素人じゃない」

星川が答えた。車輻の扉をくぐり、開いている乗降口が見えた。由乃がそっちに向かう。

「駄目、もう一輛先っ」

私は叫んだ。追ってくる者は、私たちがこの乗降口を使つたと考える。由乃は一瞬ふりむきかけ、無言で走った。次の車輻にとびこみ、通路を駆け抜ける。

「降りないで。待って」

由乃が乗降口にとりつくると私はいった。開いている扉からホームをうかがった。

四人が手前の車輻の乗降口からとびでてきた。ホームを見回し、ひとりが襟もとに固定したマイクに話しかけている。駅かその周辺に他の仲間がいるということだ。

「マズいな」

私はつぶやいた。列車が止まっても、ホームを埋めつくすほどの人はいない。降りればすぐに見つかるだろう。

「あとは覚悟ね、あいつらの」

星川がいった。私は頷いた。白昼、人間がこれだけいるところで、男ばかりの集団が女ばかりの三人組をどうにかしようとするれば、嫌でも騒ぎになる。

「やるかな」

私は星川を見た。

「やるかもね。タマを潰され、スタンガンをくらったのだから、頭にくるさ、そりゃ」

「道具もつてた？」

「わからない。もってるとしたら、うまく隠してる」

答え、星川は由乃に微笑んだ。

「ごめんね、走らせて。大丈夫だった？」

「陸上部なのよ、この子」

「オッケイ！ 京都まで走るか」

男たちはホームで散開した。スタンガンをくらったひとりとはベンチにすわりこみ、私が蹴った男もうずくまった。二人だけがホームの前後に分かれ、私たちを捜している。

「この子は大丈夫でもあたしらは無理」

私はいった。

「いっしょにしないで。何のためにジムに通ってると思ってるの」

「あら、最近はずっと運動ばかりじゃない」

「未成年者の前で何てこというの」

「ひとりが乗降口のすぐ外にきていた。」